

各駅停車・大分県歴史散歩

# ふるさと駅

(5) 宇佐

初版：2007年3月30日

## ⑱ 西屋敷・宇佐①

## 古代文化と宇佐神宮



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に掲載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

西屋敷駅開業：昭和22(1947)年3月1日

宇佐駅開業：明治42(1909)年12月21日

◀ 大鳥居をくぐって広大な神域へ

## ■モダンな神宮の駅

立石峠を下ると宇佐市で、すぐに西屋敷駅がある。豊前・豊後の境となるところで、駅前の国道10号線の路傍に国界標が建っている。

このあたりの“国境”、つまり現在の宇佐市と山香町の境界線はかなり複雑である。地勢的にいえば立石峠が境になってよさそうな気がするが、実際は峠を下って宇佐市に食い込んだかっこうであり、北・東・南の三方から山香町域が西屋敷地区を囲んでいる。だが、逆に宇佐市から見ると、西屋敷というクサビを立石峠のふもとに打ち込んでいるとみることもできよう。

ここから車窓の平野が少しずつ広がって宇佐駅に着く。宇佐神宮の参拝駅として、かつては朱色の柱にそりをうった屋根の駅舎だったが、昭和58(1983)年春にモダンな新駅舎に改築された。それでもあちこちに朱色がアクセントとして加えられ、古代文化を基調とするレリーフなどが見られる。

宇佐参宮鉄道もなくなった。大正5(1916)年、この駅から宇佐神宮と豊後高田の両方面に通ずるよう建設されたが、モータリゼーションの時代に追わ

れて昭和41(1966)年に姿を消した。古い軌道跡の土手などが残っており、一部は道路に利用されている。

## ■壮麗な国宝の本殿

駅前の10号線を行くと豊後高田方面への213号線がわかる。10号線をそのまま進むと和気清麻呂の船つなぎ石、さらに桜の並木となって宇佐神宮に着く。

寄藻川にかかる神橋を渡ると大鳥居があって広大な神域となる。初沢の池と菱形の池を中心に、表参道の左右に神宮庁、斎館、能舞台、絵馬殿などがあり、屋根のある橋として知られる呉橋からの脇参道と一緒に登り道となる。60ヘクタールという境内の半分近くを占めているのが亀山。小椋山、菱形山ともいい、春宮、八坂社、下宮、若宮、亀山社などとたどって上宮へ。

本殿は三殿からなり、現在の建物は安政2(1855)年から文久元(1861)年にかけて造営されたもの。朱塗りの柱に白い壁という壮麗なものである。各殿とも正面が三間、側面が四間で、うち後部の二間が

内院（正殿）、前部の一間が外院（礼殿、細殿）中間の一間が相の間となる。

特色のあるのは屋根。内外院をそれぞれ切妻造り平入りとし前後に並列する。このため中央部が谷となるが、そこに大きな金色の樋（とい）をかけている。これが八幡造りと呼ばれるもの。本来は33年ごとに造営する制度をもっているが、火災や兵火で狂うこともあったらしく、現本殿は前述のように江戸期以来のもので、国宝となっている。

八幡造りの源流については、神明造りが発展したという説、仏教建築に影響されたという説の二つがあるが、最近では宇佐地方で行われていた民家の平行二棟造りに由来するという説もでてきているそうだ。

## ■中央勢力とのきずな

神宮の歴史はきわめて古く、創祀は欽明天皇の時代ともいうが、現在の亀山に落ち着いたのは第一殿が神亀2(725)年で、祭神は八幡大神である誉田別＝ほんだわけ＝（応神天皇）、次いで比売大神＝ひめおおかみ＝（多岐津姫、市杵島姫、多紀理姫）が

天平3(731)年に第二殿に、そして最後に息長帯＝おきながたらし＝姫（神功皇后）が弘仁14(823)年に第三殿に祭られている。

これに先立つ養老年間、隼人の乱のさい神宮は朝廷軍を助けて自ら出陣しているほか、天平12(740)年には藤原広嗣の乱に際して朝廷の祈願を受け、さらに東大寺の大仏造立にあたって天平勝宝元(749)年には八幡神が入京している。また神護景雲3(769)年には道鏡の事件があり、和氣清麻呂が神意を問うため神宮に勅使として来たことは有名である。

こうして神宮は中央との結びつきを深めていくなかで、地方の神から国家の神へと姿を変え、伊勢神宮と並んで二所宗廟といわれるようになる。中央勢力との連携は権力と同時に財力を豊かにすることにもなり、広大な荘園の持ち主となっていった。

また、貞観2(760)年に奈良大安寺の行教が京都鎮護のため神宮の分霊を勧請して鶴岡八幡宮を設けたことから武士の崇敬を受けることになり、全国各地に分祀されていき、八幡神が普及した。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等の宇佐駅からのおよその距離

◇宇佐神宮・大楽寺（宇佐駅から4キロ。大楽寺は宮佐宮の到津家と縁の深い寺で、重文の木造弥勒菩薩など文化財が多い）

◇大善寺（重文の木造薬師如来など。同4.5キロ）

◇宇佐風土記の丘・歴史民俗資料館（同7キロ）

◇船つなぎ石（同和氣清麻呂や神武天皇伝説。1.5キロ）

⑳ 西屋敷・宇佐㊦

ナゾ多い祭神…諸説



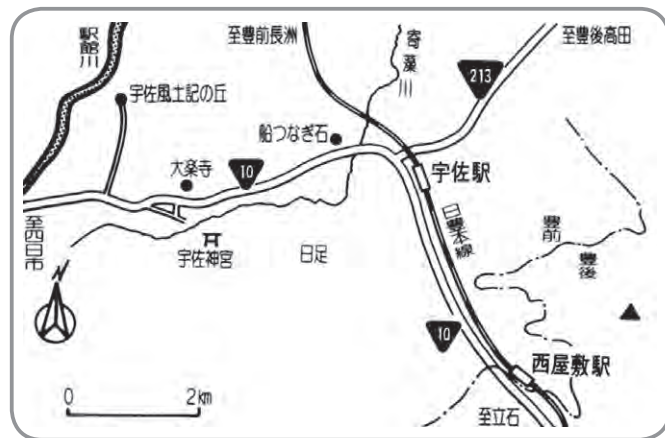
◀ 九州最古の赤塚古墳

## ■神と仏の文化

宇佐神宮はまた、いち早く神仏習合した神でもある。宇佐地方には法隆寺式の伽藍配置をもつ虚空蔵寺や法鏡寺など白鳳時代の寺院跡がある。前者の寺跡からは埴仏（せんぶつ）や法隆寺式の忍冬唐草文の瓦（かわら）、後者からは新羅様式の瓦がそれぞれ出土している。これを受けてかどうか、宇佐神宮の境内にも神宮寺としての弥勒寺が置かれていた。神仏習合もまた、中央との結びつきを強めるものであったろう。

弥勒寺の跡は呉橋に近いところにある。昭和29(1954)年から6年間かけて発掘調査が行われた結果、薬師寺と同じ様な伽藍配置で七堂伽藍が完備していることがわかった。建立については、八幡神が現在地に鎮座した神亀2(725)年に東方の日足に弥勒禅院を設けたのが最初で、天平9～10(737～9)年に現在地に移したと伝えられているが、寺跡から出土する瓦も天平期のものが最古で、これを裏付けている。

これを基にして神宮には強力な僧集団が形成され、やがて神宮の権力、資金力をバックとして国東



半島にいわゆる六郷満山の仏教文化を生むことになる。それは延暦22(803)年に最澄が入唐を前に渡海安全の祈願に訪れたのを機に、天台宗との円を深めていく。

## ■宇佐風土記の丘

ところで、宇佐神宮の発生、あるいは祭神などについてはあまりにも謎（なぞ）が多く、さまざまの説が出ている。例えば、八幡神は宇佐地方が帰化人の秦氏の勢力圏で、彼らが祭った弥秦（いやはた）

の神に由来するという説、比売神は宇佐島に下ったという三女神で、瀬戸内海や朝鮮半島への航海神であるという説、さらには邪馬台国の卑弥呼の墓が亀山で、息長帯姫は彼女と同一人物であるという説などもある。

このほか、鍛冶の神、母子神、仏教神などと性格付ける説もあり、学界の課題であるが、ともあれ祭神が三つにわかれていることなどから見て、いろいろの性格をもつ複合的な神だろうといわれている。

そして、これを生み育てたのは古代の豪族で、『日本書紀』に登場する菟狭津彦（うさつひこ）、菟狭津媛（うさつひめ）など宇佐国造（くにのみやつこ）たちであることは、まず間違いなからう。彼らの墓といわれるのが、駅館川の右岸台地にある川部・高森古墳群（国史跡）である。宇佐は市域の全部が遺跡といってさしつかえないほど、古代の住居跡や古墳の多い地だが、その中心となるのがここ。

六基の前方後円墳が目を引く。このうち九州最古の赤塚古墳からは五面の鏡が出ており、京都の大塚山古墳ははじめ三重、岡山などで出土したのと同じ類型で作られたことがわかっている。これからも、宇佐

と中央が早くから結びついていたことが推測できる。現在、ここに「宇佐風土記の丘」が建設され、神宮とともに宇佐では見落とせないところとなっている。

### ■若いエネルギー

これら大規模な古墳群、あるいはそれ以前の弥生時代の遺跡のおびただしさなど、古代の宇佐には強大な文化が存在したことがわかるが、これを背景として注目されるのが邪馬台国を宇佐とする説である。昭和 28(1963) 年に大分大学の富来隆教授が発表したのを皮切りに、数人の学者が唱えている。

その当否はともかく、現在の宇佐市が抱えている問題は、この栄光の古代文化の地に活力に満ちた新しい文化を創造していくこと。町づくりも次第に活発になっているが、そのなかでユニークなのは若者を中心とした「新邪馬台国建設公園」の運動。考えも新しいが行動も面白い。58(1983) 年 4 月には全国の“ミニ独立国”に呼びかけ、「後進国首脳会議 U S A サミット」を開催している。

基盤となる農業の振興と文化財保護を大きな柱として、宇佐の未来は若者たちの肩にかかっている。N

② 豊前長洲・柳ヶ浦

平家一門の哀（かな）しみ

豊前長洲駅開業：明治  
44（1911）年4月22日

柳ヶ浦駅開業：明治30  
（1897）年9月25日



◀ 平清経の墓と小松橋

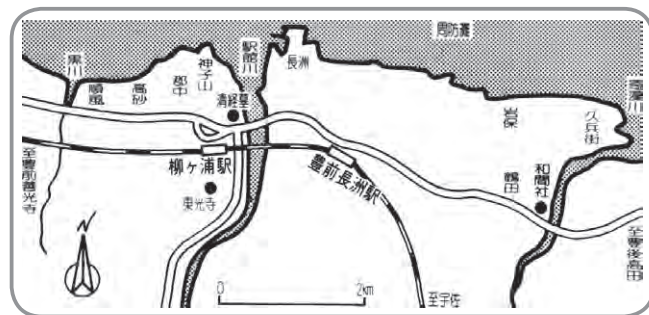
## ■ やっかい川の駅館川

駅館川の河口部をはさんで、東の右岸に豊前長洲駅、西の左岸に柳ヶ浦駅がある。駅館川という名は、古代駅馬制の宇佐駅の駅館があったことに由来するもので、現在の宇佐市役所付近にあったと推定されている。

いわば“駅”には縁の深い川であるが、これがかなりの暴れ川。たびたび洪水をおこしたので“やっかい川”とまで言われたものだが、鉄道建設にとってもやっかいな川だったらしい。豊州鉄道は柳ヶ浦まで鉄道を開通させたあと、すぐにでも大分までの延長工事にかかりたかったようだが、行く手にあるのが、まず駅館川だった。鉄橋をかけるのに相当の覚悟が必要だった。結局、豊州鉄道が九州鉄道となり、国鉄に買収され、12年後にようやく宇佐駅まで開通した。

このため、柳ヶ浦駅が起終点駅だった期間は長く、人や物資の集散地として大いに繁盛したものだ。開業当時の駅名は長洲で、翌年に宇佐駅と改称している。しかし、新しい宇佐駅の誕生で改名を迫られ、開通前に明治42(1909)年10月15日に現駅名となった。

一方、現在の長洲駅は宇佐まで開通した1年半後に開設されている。柳ヶ浦との間は2キロ足らず。



当時の激しい政争のなかで、わが町にも駅を…ということから、町はずれの田んぼの中に置かれた“政治駅”だったという。

## ■ 宇佐行幸と清経入水

長洲、柳ヶ浦は、宇佐地方が周防灘・瀬戸内海に向かって開いた海の玄関だった。たくさんの人と文化がここを經由して宇佐に入り、出ていった。

なかには悲しい物語もあった。寿永2年(1183年)、都を落ちた平家は九州で再興を図ろうと太宰府に入ったが、緒方惟栄ら反平家勢力に追い出され、安徳天皇を奉じて豊前の海を転々とする。かれらが

まず頼ったのが宇佐神宮である。

当時の大宮司、宇佐公通の妻は平清盛の娘だったといわれ、神宮と平家の関係は深かった。平家が公通を頼みとしたのは当然で、神宮の権力、財力、あわせて神宮寺系の僧兵の協力も得たかったろう。一行は柳ヶ浦に上陸、9月初めから神宮に参籠（ろう）を始めた。しかし、平家への神の返事は冷たかった。天下の機をみるに敏だった神宮は、すでに勝敗の行方を予測していたのではあるまいか。

こうして平家は再び海に出るが、悲話はまだあった。平清経の入水である。かれは内大臣重盛の三男で、当時は左中將、20歳あまり。前途をはかなんで柳ヶ浦沖で水に入ったと伝える。柳ヶ浦と長洲を結ぶ小松橋の橋名はこの哀話にちなみ、柳ヶ浦側の橋のもとに清経の墓といわれる五輪塔がある。

## ■宇佐航空隊の跡

悲劇は近代にもあった。戦争である。明治の日露戦争当時、多くの負傷兵が終点だった柳ヶ浦駅まで列車で送られ、ここから人力車で別府の病院に運ばれた。そのたびに婦人会が出迎えをさせられ、兵を激励

したというが、昭和の戦争はここをも戦場とした。

昭和14(1939)年、広い平野を利用して宇佐海軍航空隊が正式に開隊、18(1943)年には飛行機を格納する掩体壕（えんたいごう）を造った。そして20(1945)年、ここは特攻の基地となる。同年3月18日を皮切りに、空襲が相次いだ。町は廢墟となり、多くの人が死んだ。地元に住む放送作家の今戸公德氏が「僕の町も戦場だった」に当時のもよみをなましく描いている。

いま、航空隊の跡は平和な水田に戻っている。だが、あちこちに残る掩体壕が当時の悲劇を忘れさせない。

水田といえば、この辺り一帯は穀倉といわれる宇佐平野の中でも最も平坦（たん）で、農業の中核となるところ。海岸には江戸時代に開かれた新田が並んでいる。駅館川の河口を真ん中にして、東の寄藻川から西の黒川までの間に久兵衛、鶴田、岩保、神子山、郡中、高砂、順風などの新田が続く。

やっかい川といわれた駅館川の総合開発も行われ、用水確保、畑地かんがい、圃（ほ）場整備も一応の成果をあげた。大型コンバインなども登場し、農業の近代化は目ざましいばかりだ。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等の豊前長洲、柳ヶ浦両駅からのおよその距離

◇平清経の墓（柳ヶ浦駅から0.7キロ。柳ヶ浦、長洲一帯にはこのほかたくさんの方家の伝説地がある）

◇東光寺（五百羅漢と仏足石が有名。同1.5キロ）  
◇和間神社・浮殿（宇佐神宮の放生会の場所。長洲駅から3.5キロ）

◇長洲の精霊送り（盆行事。海岸で豪華な灯籠を焼く。同2キロ）

② 豊前善光寺・天津

宇佐平野の中心地

豊前善光寺駅開業：明治  
30 (1897) 年9月25日

天津駅開業：昭和31  
(1956) 年10月1日



◀ 国指定重要文化財の善光寺本堂

## ■芝原善光寺の参拝口

広い宇佐平野の中に、豊前善光寺や天津の駅が続いている。沿線是水田ばかり。その間に集落が点在しているという感じである。

豊前善光寺も柳ヶ浦と同様に、駅名が二回にわたって改められている。開業当時は四日市と称した。宇佐平野の中心地である当時の四日市町（現在宇佐市）への連絡口だったからだろう。その後、大正8年に駅所在地の村名をとって高家郷（たけいごう）としたが、これはわずか三カ月のいのちで、すぐに現在の駅名となっている。

善光寺の名は、この駅が参拝口となる芝原善光寺に由来している。同寺は信濃、甲斐と並んで三善光寺の一つ。天徳2(958)年に空也上人が開基したと伝えており、信濃善光寺の如来分身が本尊という。

本堂は国指定の重要文化財。建長2(1250)年に建てられたもので、鎌倉時代の様式をよく伝えている。桁行（けたゆき）五間、梁間（はりま）七間、単層の四柱造り。斗拱（ときょう）は和様と唐様がまじっている。本堂の横に建武4(1338)年の板碑（県文化財）があるほか、文化財が多い。

## ■姿消した豊州線

善光寺駅から、かつて四日市を経て宇佐の山間部に通ずる私鉄があった。豊州線と呼びならわしていたが、正式には日出生鉄道である。大正3(1914)年に四日市まで通じ営業を開始した。その名でもわかるように、将来は陸軍演習場のあった日出生台高原まで延ばす予定だったが、大正11(1922)年に院内町でストップ。その後は自動車の普及で苦しい経営を続けたあげく、災害で駅館川の鉄橋が流されたりして昭和28(1953)年に姿を消した。同時に善光寺駅もまた、四日市の玄関としての役割を薄められた。

## ■経済的中心・四日市

現在の宇佐市は、宇佐平野にあった駅川、四日市、長洲、宇佐の四町が昭和42(1967)年に合併して生まれた。宇佐は神宮のおひざもと、長洲は港町、駅川は農業主体といったように、各町にはそれぞれ特色があったが、その点、四日市は平野部と山間部を



結ぶ要地にあり、宇佐一円の経済的中心だった。

四日市という地名自体、ここで定期市が開かれたことを語っている。天文22(1553)年、肥前鬼子岳城主だった渡辺氏が来て城を構え、城下に市が立てられたという。

その城地は、江戸時代に入って四日市陣屋に引き継がれた。宇佐郡のうち2万石が幕府領となって、ここに支配役人が入っていた。西国筋郡代役所があった日田から代官もたびたび出張して来ており、豊前長州・柳ヶ浦駅のさい紹介した海岸部の新田開発に力を入れている。

### ■並ぶ東西本願寺別院


陣屋は慶応4(1868)年、宇佐郡佐田村(現在、安心院町)出身の佐田秀が起こした倒幕軍によって焼き打ちされ、わずかに門を残すだけ。秀はこのあと宇佐神宮の裏にある御許山にこもって檄(げき)をとばした。これを御許山騒動と呼んでいる。

陣屋跡の近くに真宗大谷派別院(東別院)と真宗本派本願寺別院(西別院)がある。現在の東別院は永禄5(1562)年の開基だが、これも御許山騒動で

焼かれた。再建された堂は京都の本山よりも大きいそうだ。西別院は天保7(1836)年の再建立で、くぎを一本も使っていない木造大建築。両院の巨大な屋根が並ぶ姿は壮観だ。両院とも毎年12月9日から報恩講の“お取越し”があり、西日本各地からの参拝客でにぎわう。

### ■100にのぼる古墳群

四日市周辺も古代遺跡の多いところ。町並みのはずれにある国史跡の横穴古墳群は100余にのぼり、一部には彩色も見られる。特に一鬼手(いちきで)A号墳は墓門に9個の同心円文が並べて描かれている。同じ国史跡では葛原古墳がある。巨大な円墳だが、もともと前方後円墳だったとも思える。近くに扇塚古墳もあり、駅館川右岸の川部・高森古墳群と、左岸のこの古墳の被葬者がどういう関係にあったか注目される。

ほかに遺跡は多いが、天津駅近くの京徳遺跡は弥生-古墳時代の墓地で、破壊寸前のところを地元民の努力で守られ、公園となった。天津の海べにある布津部(ふつべ)は名横綱・双葉山の出身地。 

<メモ>

周囲にある名所旧跡等の豊前善光寺、天津両駅からのおよその距離

◇芝原善光寺(豊前善光寺駅から2キロ)

◇安楽院(柳ヶ浦駅の項で紹介した宇佐大宮司公通の墓がある。公通はこのあたりを館としており、安徳天皇が仮宮にしたと伝える。同2キロ)

◇四日市陣屋跡、本願寺別院、横穴古墳群(同4キロ)

◇葛原古墳(同3キロ)  
京徳遺跡(天津駅から1キロ)

---

## デジタルブック版

### 「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（5）

---

2007年3月30日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育研究センター

発行 NAN－NAN事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトをご利用下さい。